新たな価値の創造❶

海への「おそれ」が芽生えるか!?

～萩博物館「海の妖怪展」の挑戦

堀　成夫（萩博物館）

キーワード　畏怖の念、海、萩博物館、展示会、妖怪

令和に生きる子供達に向け「海の妖怪」を展示しよう！　ただ、史上初の妖怪の展示会というわけではない。これまでにも各地の博物館や美術館で妖怪にまつわる文書、絵図、浮世絵、掛軸などが展示され、昔の人々がいかに妖怪を想像・創造しビジュアル化していったかを楽しみ学ぶことのできる貴重な機会がつくられてきた。その人気やニーズは今後も衰えることがないだろう。しかし、山口県萩市の萩博物館には少し違う実情があった。当館は17年前より毎夏、深海魚、危険生物、はたまた未確認生物など、エキセントリックな生きものをテーマに、ストーリー仕立てで迷路のような会場をつくり、子供達に標本や資料を見たり触ったりしながら探検してもらう展示会を行ってきた。そのスタイルで、次は妖怪を展示してほしいとの声がいくつも寄せられていたのである。また、怪異と関連づけられることのあるリュウグウノツカイなどの海洋生物が萩には以前からよく出現し、その謎に関心が寄せられていた。ならば、当館の記念すべき開館20年目の２０２４年夏、海の妖怪の展示会に挑もうではないか。

学芸員や研究員、実行委員による協議、関係者や事業者との試行錯誤の末、昨年７～９月、当館の約４００㎡の会場に次のような、その名も「海の妖怪展」が開幕した（図1）。まず、入口ゲートをくぐると、薄暗い海のような廊下に何人かの女性の絵がうっすら照らし出されている（図2）。それらはレンチキュラー印刷されていて、そばを通ると一転、長崎県などの海辺に伝わる「濡女」や「磯女」に変化して見えるのだ。ゾッとしながら足早に過ぎると、今度は日本各地の海辺の妖怪の伝承がたくさん掲げられた空間に出る。とても全ては読み切れないが、おびただしい数の伝承に囲まれると、日本人がこれほどにも海に怪異を見出してきたのかと感嘆せずにはいられない。その傍らには、三重県志摩地方の海女が妖怪「共潜（ともかづき）」から身を守るためおまじないの印「セーマン・ドーマン」を描いて身につけてきたイソテヌグイ（鳥羽市立海の博物館蔵）が展示されている（図3）。それは、海に生きる人々が海の超自然的な力を信じてきた証として異彩なオーラを放つ。さらに進むと係員が待機しており、その先は柄杓（ひしゃく）を一本ずつ持って行くよう勧めてくる。用意された柄杓は、なぜか底が抜けている。訝（いぶか）しみながら受け取って真っ暗な通路をおそるおそる歩くと、周囲の壁にめらめらと青白い光がうごめき、どこからともなく「柄杓を貸せ～」と声が聞こえてくる。「船幽霊」だ！　昔の人は船の底にたまる水を汲み出すため柄杓を積んでいたが、海で死んだ人の霊とされる船幽霊（ふなゆうれい）はそれを借りて海水を注ぎこんで船を沈めようとしてくるという。昔の人は、そんな時には底の抜けた（または穴のあいた）柄杓を渡せば水を注がれず逃れられると言い伝えてきた。それにちなみ、会場でも底なし柄杓を船幽霊の絵に投げ込むと先へ進むことができる（図4）。その後、「海坊主」などの絵図、妖怪「ダンダラボッチ」を撃退すべく編み出されたという三重県波切の「大わらじ」（志摩市歴史民俗資料館）、実在の魚介類がモチーフと考えられる「鰐鮫（わにざめ）」「龍魚」「蛇蛸（じゃたこ）」、クライマックスは「河童（かっぱ）」「人魚」そして「アマビエ」…と、日本各地の海の妖怪とその周辺や背後のモノ・コトを観覧・体験・体感していくうちに、妖怪の本質に関わる大事なことに気づいていく。昔の人はいつも自然と共に暮らし、人智を超えた自然現象に遭うと恐怖や不安を抱いてきた。妖怪はそんな人の心の変化から生まれたものであり、その源泉は、昔の人の心にあった海への「おそれ」（畏怖の念）なのだ…と。

右／図3 会場内のメイン部分。資料やグラフィックだけでなく、ギミック、デジタル演出、妖しい照明などを施した迷路のような構造

左／図4 来場者が船幽霊と対峙するギミックは、SNSで大きな話題を呼んだ

図2 入口ゲートをくぐって廊下を進む子供達。この先、女性の絵のそばを通り過ぎようとすると…

図1 萩博物館「海の妖怪展」のポスター・リーフレット

図5 会場の一角に、現代の萩の海の異変・珍魚・怪魚などをぎっしり集めて展示

萩で妖怪を体験・体感できる！　萩博物館がまた変わったことをやっている！　と話題を呼び、本展は約2ヶ月の会期中に地元・萩市の人口を上回る約4万5千人の来場が市内外からあった。しかし私は、昔の人にあった海への「おそれ」に気づいてもらうだけでなく、それを現代の子供達に「芽生えさせる」ことまでできないか、と考えた。

そこで、おそらく前例がないであろうことに挑戦した。会場の末尾に、本展のストーリーのエピローグとして、現代の海の「怪異」をぎっしり展示したのである（図5）。「アマビエ」のモデルとも考えられるリュウグウノツカイなどの深海魚が近年、なぜか萩近海に頻出している。水温の変化のためか、毒があると恐れられているヒョウモンダコやガンガゼも増加している。海底では、海藻が無残なほどに姿を消しつつある。科学や医学が発達していない時代の人々なら、このような異変や怪異を目の当たりにした暁には恐れを抱き、何かしら教訓や前兆を告げる妖怪を創造していたに違いない。そんな異変や珍魚・怪魚の標本や写真をいくつも目の当たりにしてもらったのである。そして、それらを見て感じたことをモチーフに妖怪を創造してもらう「海の妖怪創作コンクール」を展示後のオプションとして行った。

このコンクールには１０９点の作品が寄せられた。萩の寺院に「大蛇の頭」として伝わるサメの頭のミイラをモチーフに、環境変化をもたらす人々を戒めるべく、尾から危険な炎を出す妖怪を描いた小学生の作品は最優秀賞を受賞（図6）。ほかにも、人物、生物、魔物などを自在に改造して環境変化を人々に伝えたり警告したりする妖怪が続々。現代、妖怪はアニメやキャラクターとして娯楽的にも親しまれているので、子供達はその感覚で楽しみながら創作意欲を燃やしてくれたのだろう。しかし、数々の作品の奥底に、昔の人ほどではないにせよ、海への「おそれ」のようなものが見えるのだ。子供達は本展の序盤から中盤にかけ、日本人がいかに海を人智を超えた存在と見なしておそれていたかを知り、いくらか共感できる部分に気づいたり、自身にも似たメンタリティがなくもないと思ったりした子供もいただろう。そこへ、現代の海の環境異変の数々が目に飛び込んでくれれば、科学で説明できる・解決できるはずの現代でも、人智や科学が海の見えない力に凌駕されているような戦慄や不安を感じたに違いない。程度の差はあれ、現代の子供達に海への「おそれ」がわずかながらも芽生えたのではないだろうか。

図6「海の妖怪創作コンクール」の最優秀作品「蒼炎毒蛇（そうえんどくじゃ）」（藤田大耀さん作）。青い炎をまとった尾のあたりに、現代の環境異変の一因・海洋ゴミが見える。傍らでは、古来の海坊主や平家蟹が圧倒されている

現代、日本各地で海の環境異変が起こっている。海以外でも様々な自然環境の異変や災害が毎年のように発生している。子供達はこの先、間違いなくその中を生きていかねばならない。そんな時代に、もちろん科学の知識や技術を駆使して解決したり乗り越えたりすることは重要である。一方で、頭の片隅にでも、海は人智を超えうるものなのだという「おそれ」をもつことは、異変や災害を予感したり、海に対するこれまでの行動を省みたり、海の未来に思いを巡らしたりと、これからの時代を生きていく「術」としてあえて必要なのではないだろうか。

昔の人々が海への「おそれ」をもっていたことに気づいてもらう上で、各地で語り継がれてきた昔話や伝説などを伝える絵本やアニメ、紙芝居などのメディアが果たす役割は大きい。そこへ、様々なメディアの意図を三次元化して観覧・体験・体感・探究させられる博物館は、海への「おそれ」を再起させたり芽生えさせたりするツールとなりうると提起したい。海への「おそれ」を巡る萩博物館の挑戦は、これからも続いていく。

謝辞

ここで取り上げた萩博物館の「海の妖怪展」は、船の科学館「海の学び　ミュージアムサポート」プログラム1「海の企画展サポート」の支援を受けることにより実施することができた。同館の担当者や関係者の方々、および、本展の企画・準備・実施において情報提供や資料貸出など多岐にわたってご協力を賜った志摩市歴史民俗資料館・鳥羽市立海の博物館ほか全国各地の博物館・美術館等の学芸員や担当者の方々に深謝する。